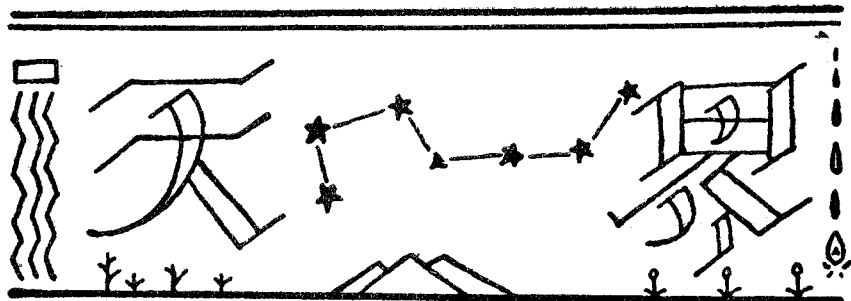




第百四十一號

(第十三卷)

昭和八年一月

“ 1933 年 ”

は、年の始め数ヶ月間、久しぶりに、親しみある火星を観る時である。火星は去1932年2月初に太陽と會合してからは、日一日と我が地球に近づきつつあるが、今年に入つて、1月22日に獅子座で逆行に轉ずると共に、視直径も $10''$ を越え、愈々觀望好期に入る。3月2日早曉對衝となり、光度—1級、視直径 $18.2''$ 、レグルス星を壓倒しつつ、夜半の中天に輝やく。火星の世界は此の頃恰も眞夏の季節で、北極の雪は消え、南極は白皚々の冬景色を表はす時である。4月初め火星は順行に移り、其れからは又遠ざかり去る。

火星が去る頃から、金星が宵の明星として輝やき始める。そして年末になるほど、離角は大きく、光りは増す。遂は11月26日に東方の極大離角 $47^{\circ} 17'$ といふレコードの現象を呈し、光度は—4級に登る。其の後、益々光りは大きくなって、12月の最終日に—4.4といふ極大光輝を放ちつつ翌1934年の正月を迎へることとなる。

此の年には、月蝕が一回も無く、只、金環日食が二回ある。一は2月24日午後のものである。他は8月21日おひる過ぎのものである。何れも我が日本からは縁が無くて、わづかに8月のものだけは部分食が九州以西と滿鮮方面から見えるに止まる。金環食線は、2月の場合、南米チリ國から始まり、アルゼンチンと南大西洋とを横ぎり、アフリカの中央を通つて、アラビヤのアデン港邊りに終る。又、8月のものは、エジプトのナイル河口に始まり、シリヤ、ペルシヤ、北インド、ボルネオ等を経て濠洲北部に終る。

蝕には恵まれない代り、珍らしい掩蔽が二つ三つある。先づ1月15日早曉にはレグルスの掩蔽、又、年末12月20日には日没前の西天に金星と土星とが相ついで掩蔽となる。

今1933年は大ハルシエルが、恒星の固有運動の傾向から見て、金太陽系の宇宙運動を發見してから正に150年目に當る。即ち、統計天文學の誕生を祝ひ、其の成果を學ぶべき年である。

此の7月を以つて終る「國際極地觀測」の成績や如何？

又、延びに延びた第四回汎太平洋學術會議が、果して此の年の春カナダで開かれるや、否や！？（天文年鑑より）